

使徒の働き2章1-13節 「聖霊降臨」

1A 聖霊の満たし 1-4

1B 五旬節 1

2B 激しい風と炎 2-4

2A 自分の言葉の賛美 5-13

1B 敬虔なユダヤ人 5-6

2B 離散のユダヤ人 7-13

本文

使徒の働き2章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、使徒の働きに入っています。午前礼拝に前半、1-13節を一節ずつ見ていき、午後礼拝の後半、14節以降を一節ずつ見ていきます。私たちは、素晴らしいバプテスマ式を先週執り行うことができましたが、2章では聖霊が、祈っている弟子たちに降り注がれ、それからペテロの福音を語る言葉、説教によって人々が悔い改め、バプテスマを受ける話を書いてあります。イエスの御名によるバプテスマを初めて受けた人々の話です。私たちは、「御霊を消してはいけません。(Iテサ 5:19)」という言葉が与えられています。御霊によって与えられた火を打ち消してはいけない、自分の思いや世に対する思い煩いで、御霊が動かれていることを打ち消してはいけないと言われていています。主から与えられた情熱を奮い立たせていきたいですね。

前回の学びで、イエス様の下さった聖霊の約束がありました。「1:4-5 エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。ヨハネは水でバプテスマを授けましたが、あなたがたは間もなく、聖霊によるバプテスマを授けられるからです。」聖霊によるバプテスマの約束です。そして主は言われました、「1:8 聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」この約束を待って、弟子たちは屋上の部屋に集まって、「1:14 心を一つにして祈っていた。」とあります。そして2章に入ります、聖霊の約束が実現するのです。

1A 聖霊の満たし 1-4

1B 五旬節 1

¹五旬節の日になって、皆が同じ場所に集まっていた。

時は、「五旬節の日」であります。私たちは、ここで私たちの主イエス・キリストの福音が、ユダヤ人の例祭、例年の祭りの中で大規模に行われたことを思い出す必要があります。

福音書の中で、過越の祭りの時にイエス様が死なれました。最後の晩餐とは、子羊を過越の祭

りの日に屠って、その肉を食べ、また種なしパンを食べる時であることを覚えていました。それは、イスラエルの民が、エジプトの虐げから解放され、救われた時のことを思い出すものです。イスラエルにとっての救いを記念するものです。けれども、イエス様はそのパンを取って、「これは、あなたがたのために裂かれる、わたしのからだです。」と言われ、ぶどう酒の杯を飲みかわす時は、「これは、あなたがたのために流される、新しい契約のしるしです。」と言われました。そうです、過越の子羊、屠られて、その血を家の門柱と鴨居につける儀式は、十字架に付けられたキリストを示していたのです。そして、イスラエルの民は紅海を渡って救われましたが、それは水のバプテスマを表していました。その水は、彼らを救い、追ってくるエジプト軍を滅ぼしましたが、同じように、水のバプテスマはキリストの死とよみがえりを示し、サタンとその勢力が滅ぼされたことを示すものです。

レビ記 23 章にて、イスラエルが守るべき祭りが七つ列挙されています。初めに過越の祭りがあり、それに合わせて種なしパンの祝いが七日間続きます。また、過越の祭りの三日目には初穂の祭りというものがあります。「23:10 イスラエルの子らに告げよ。あなたがたがわたしが与えようとしている地に入り、収穫を刈り入れたなら、収穫の初穂の束を祭司のところに持って行きなさい。」春の収穫である、大麦の初穂を献げるものです。その日は週の初めの日ですが、その日に、イエス様は墓の中から出てきて、復活されたのです。ですから、コリント人への手紙第一 15 章に、「15:20 しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。」とあります。このようにして、主の十字架も、復活も、ユダヤ人の祭りの暦に沿って起こっています。

そして、今、五旬節の満ちた日に聖霊が降るのです。五旬節とは、小麦の収穫を祝うものです。「七週の祭り」とも呼ばれて、過越の祭りの日から七週を数えます。ですから 5 月下旬から 6 月の初めにあります。今年 2020 年の教会の暦では、5 月 31 日でした。

その時に、小麦の初穂を主の前に献げます。それだけでなく、興味深いことに種のあるパン、イースト菌のあるパンを二つ、主の前に持って行きます。この日に、聖霊が降り、教会が生まれるのです。パン種があるというのは、パウロが、コリントの教会の人々に「パン種を取り除きなさい」と言った箇所があります。「I コリ 5:8 古いパン種を用いたり、悪意を邪悪のパン種を用いたりしないで、誠実と真実の種なしパンで祭りをしようではありませんか。」これは、種なしパンの祝いのことをパウロは話しているのですが、悪意と邪悪のパン種だということです。教会の中に、悪があるのだという前提で語っています。そうです、神の恵みによって救われ、神のものとなるために聖別された教会ではありますが、キリストが戻ってこられるまでの間、キリストの身文にまで成長する存在であります。言い換えれば、罪があり、悪が混じっているところでもあるのです。そして、二つのパンを用意するということはどういうことでしょうか？「エペ 2:14 実に、キリストこそ私たちの平和です。キリストは私たち二つのものを一つにし、ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊し」とあります。この二つとは、ユダヤ人と異邦人のことです。キリストにあって、ユダヤ人と異邦人が一つにされた教会を象徴していたのです。

ユダヤ人の祭りや律法は、コロサイ書には、「後に来るものの影であり、キリストが実体」であると教えていますが、このようにしっかりと、やがて来られるキリストとその働きがあったのです。ですから、過越の祭りの後、五十日を数えた後の五旬節に聖霊が降るということは、イスラエルの人にとっては、まさに神の約束の訪れでありました。

そして、彼らは、「皆が同じ場所に集まっていた」とあります。これは、第三版までは、「一つ所に集まっていた」とありまして、一つになって集まっていたという意味しかありません。1章14節にあるように、人々が「一つになって集まっていた」というところです。その続きで、一つになって集まっていたということです。イエス・キリストを自分の主とする者たちが一つになって集まっている、そして祈っているということを始めました。主の共同体に、聖霊が降って、それで人々が力強い証しを、立てていくということでもあります。私たちは、礼拝をするために一つになって集まっています。そして、祈り会を持っています。教会のために、社会や世界のために一つになって祈ります。そして、献金というのは後に出てきますが、要は一つにして分かち合うということです。ここには個人主義の余地がないですね、主の共同体あつての聖霊の働きなのです。

2B 激しい風と炎 2-4

² すると天から突然、激しい風が吹いて来たような響きが起こり、彼らが座っていた家全体に響き渡った。³ また、炎のような舌が分かれて現れ、一人ひとりの上にとどまった。⁴ すると皆が聖霊に満たされ、御霊が語るままに、他国のいろいろなことばで話し始めた。

驚くべき徴です。まず、「天から突然、激しい風が吹いて来たような響き」とありますが、風とさえも、ユダヤ人にとっては「聖霊」と関連づけます。なぜなら、風も息も霊も、同じヘブル語が使われているからです。ですから、主がアダムを土地の塵から造られて、息を吹きかけて、アダムは生きる者となりました。同じように、イエス様は弟子たちに息を吹きかけて、「聖霊を受けなさい。」と復活の日の夕方に言われていましたね。風について、ニコデモに対してイエス様が語られた時に、「ヨハ 3:8 風は思いのままに吹きます。その音を聞いても、それがどこから来てどこへ行くのか分かりません。御霊によって生まれた者もみな、それと同じです。」と言われました。風が吹くと、そこには御霊が働いておられることが分かるのです。

そして、その響きがあった後に、「炎のような舌が分かれて現れ」とあります。イエス様が水のバプテスマをヨハネから受けられた時には、鳩のような形をして聖霊が降って来られましたが、今は炎をともって現れておられます。ユダヤ人にとって、火や炎の現れは、聖なる神が天から降って来られたことを思い出させるものです。今、弟子たちはエルサレムにいますが、そこはモリヤの山にあります。イスラエルの民は、シナイ山で主が火の中で現れたのを見ました。「出エジ 19:18 シナイ山は全山が煙っていた。主が火の中であって、山の上に降りて来られたからである。」エリヤが、イゼベルから逃げて、シナイ山まで行った時に、そこで「激しい大風」があり、地震があり、そして、「地震の後に火があった」とあります(I 列王 19:12)。バプテスマのヨハネは、イエス様の与え

られるバプテスマは、「聖霊と火」のバプテスマと言っていましたが、聖霊の風が吹いて、それから神の聖さを表す火があった、ということです。

しかし、この徴で特異なのは、それが舌のような形があって、一人一人が聖霊に満たされたら、「他国のいろいろなことばで話し始めた」とあるのです。これが驚くべきことです。エルサレムには、祭りを守るために世界中に離散しているユダヤ人が集まっていますが、彼らの住んでいる国々の言葉で語っていたのです。自分の理解できる言語ではないのに、聖霊によって舌が動き、語るようにするのを「異言」と呼びます。ここには、どのような意義があるのでしょうか？主が、何をもって、こんな徴を与えられたのでしょうか？異言は、ここ一回だけの奇跡ではありません、使徒の働きにおいて、聖霊のバプテスマを受けた人々の中で語り出すしるしであるし、パウロはコリント第一 12 章から 14 章にかけて、異言の賜物について多くを語っています。ですから、今日の教会にも与えられた、御霊の賜物の一つです。

主が、世界中からユダヤ人が来ていて、彼らがその地方の言葉と、ユダヤ人の言葉であるヘブル語また、ローマ帝国全体で語られているギリシア語のどちらも語ることができ、二か国、三か国を語ることができる中で、このことを行われたのは、やはり、アブラハムに対する神の約束の成就ではないかと思うのです。「創世 12:3 地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」主は、バベルにおいて、人々が塔を建てて天に届こうとしてしまったので、言葉をばらばらにされました。ノアの家族から出てきた人々は、一つの民、一つの言葉でありましたが、バベルの事件を境にして、言葉が分かれ出て、民族が分かれ出ました。けれども、主は、新たにご自分の呼びかけ、召しに従って生きるアブラハムから、新たな国民を造られ、その国民によって、あらゆる部族の祝福とすることを定めておられたのです。そしてその国民の子孫であるキリストにあって、あらゆる部族にアブラハムの祝福を与えようとしておられたのです。

イエス様は弟子たちに、聖霊が臨まれると、「1:8 地の果てまで、わたしの証人となります。」と話されていました。そこには、ユダヤ人だけでなく、他の民族、他の言葉を話す異邦人に対しても証言することが含まれています。今、異邦人の間で生きているユダヤ人たちが集まるところで、それぞれの地方に言葉で語らせることによって、天の御国は、ユダヤ人だけでなく、あらゆる民族、あらゆる国民、あらゆる言語からの人々が、神をあがめている世界なのだということを示したかったのではないかと、思われます。

私が、このコロナの流行ですごいなと思ったのは、世界中のクリスチャンが主への賛美を、動画で一つにまとめたことです。アメージンググレース、驚くばかりの有名な歌を、なんとコロナ流行下の 50 の国々のクリスチャンがそれぞれの場所から、それぞれの言葉で賛美するのです。それを編集して、一つの歌を、それぞれの言葉で歌っているのです。中には、アフリカ、ベトナムでそれぞれの民族衣装で歌っています。イスラエルとパレスチナでそれぞれが歌っていて、敵対しているように見える民族が一つにされている姿も出てきます。天からの激しい風は、この天の幻を示したか

ったのではないかと思います。

2A 自分の言葉の賛美 5-13

1B 敬虔なユダヤ人 5-6

⁵さて、エルサレムには、敬虔なユダヤ人たちが、天下のあらゆる国々から来て住んでいたが、⁶この物音がしたため、大勢の人々が集まって来た。彼らは、それぞれ自分の国のことばで弟子たちが話すのを聞いて、呆氣にとられてしまった。

ユダヤ人の成年男子は、七つの祭りのうち、三大祭りである過越の祭り、五旬節、そして仮庵の祭りを祝うために集まるように命じられていました(出エ 23:17)。その時、ローマ時代には、帝国のあらゆるところに、ユダヤ人が散らばって生きていました。離散の歴史は、アッシリア捕囚とバビロン捕囚から始まります。北のイスラエル王国の十部族はアッシリアによって捕え移され、南のユダ王国はバビロンによって捕え移されました。ペルシア帝国がバビロンを滅ぼすと、一部のユダヤ人は帰還しますが、大勢はそれぞれの地に居残りました。そして、地中海沿岸を囲む地域と、今のトルコ、それからメソポタミア地方に至るまで、広範囲に住んでいました。それが、「天下のあらゆる国々から来て住んでいた」の意味合いがです。

その彼らが、激しい風が吹いてくる響きによる物音が聞こえたため、集まってきました。そして、自分の国の言葉で、イスラエルの片田舎に住むガリラヤのユダヤ人たちが語るのを聞いたのですから、呆氣に取られたのです。当時、AI による自動翻訳アプリなどもちろんありません。いや、AI ではなく、それぞれの口と舌に、内臓 AI でもあるかのように流暢に語っているのですから、驚きです。けれども、彼らが「敬虔なユダヤ人」とルカが書き記していることに注目してください。神を畏れかしこむユダヤ人たち、という意味です。この彼らは、神を求め、神に仕えている人々であり、その彼らに主がしるしをお示しになったのです。これから、ペテロの福音宣教が始まります。そして、この彼らの心が刺され、悔い改めます。そして、この彼らがエルサレムから、良き知らせを自分の住んでいる地域に携えていったことでしょう。

2B 離散のユダヤ人 7-13

⁷ 彼らは驚き、不思議に思って言った。「見なさい。話しているこの人たちはみな、ガリラヤの人ではないか。⁸ それなのに、私たちそれぞれが生まれた国のことばで話を聞くとは、いったいどうしたことか。

彼らは驚き、不思議に思っています。ガリラヤの人たち、自分の生まれ育った言葉話を話しています。ガリラヤ人と言ったら、「イスラエルの片田舎」という意味合いも含まれています。無学の者たちということです。それに、マルコ 14 章 70 節で、ペテロの語ることばが、ガリラヤの訛りがあるので、それでイエスの仲間だと指摘して、ペテロが知らないと否定した場面があります。ガリラヤ人は、外国語の習得において特徴のある発音の仕方をしていたので、その特徴を隠せなかったのだでしょ

う。ところが、見てください、流暢に語っているのです！

しかし思い出してください、イエス様がガリラヤ地方で行われた奇跡と不思議は、そこにいる人々を驚かせました。「マルコ 2:12 こんなことは、いまだかつて見たことがない。」と言っていました。驚きから驚きの連続でした。驚きと不思議は大事です、そこには神が介入しているからです。聖書で、「不思議な助言者」と呼ばれたのは、まさしくメシア、イエス様でありました(イザヤ 9:6)。不思議というのは神の領域であり、人のわざや人の知恵によるものではありません。

⁹ 私たちは、パルティア人、メディア人、エラム人、またメソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントスとアジア、¹⁰ フリュギアとパンフィリア、エジプト、クレネに近いリビア地方などに住む者、また滞在中のローマ人で、¹¹ ユダヤ人もいれば改宗者もいる。またクレタ人とアラビア人もいる。それなのに、あの人たちが、私たちのことばで神の大きなみわざを語るのを聞くとは。」

ここに、先ほど話した、ユダヤ人の離散がどれほど広範囲に至っているか、またユダヤ人がどのようなところに住んでいたのかを良く表しています。始めに、メソポタミア地方とさらにその東方から来たことを言っています。「パルティア人」は、イランの北部地域にパルティアという国がありましたが、その人々です。そして、メディアもその近くの地域であり、エラムは南部ですね。ペルシアの首都スサも、エラムにありました。そしてイラクや今のトルコ東部のところがメソポタミアです。ティグリス川とユーフラテス川に挟まれた地域です。

そして、ユダヤとありますが、エルサレムのすぐ周りの地域です。それから今のトルコ全体にある地域の人々を列挙しています。カパドキアはトルコ中部にあります。あの有名な観光地カッパドキアのことです。ポントスはカッパドキアの北にあり、黒海に面しており、アジアはトルコの西側にあり、エーゲ海に面し、黙示録の七つの教会はそこにあります。フリュギアはアジアの東隣、パンフィリアはフリギアの南、地中海に面しています。それから、一気に北アフリカの地中海に面する地方を挙げています。エジプトとクレネです。クレネは、今のリビアにあります。ここもローマ帝国が征服しており、イエス様の十字架を途中で担いだシモンは、クレネ出身です。そしてローマ帝国の中心、ローマからのユダヤ人もいます。ローマ人への手紙をパウロが書きましたが、そこは彼の始めた教会ではなく、すでに立てられていましたから、ここにいたユダヤ人が初めに福音を伝えた可能性があります。

これらの地域に、ここで回心したユダヤ人の一部は戻って行ったことでしょう。そして、使徒たちもそういった地域を巡回し、ユダヤ人の会堂、シナゴグに行き福音を伝え、また、建て上げられた、異邦人も含まれる教会に巡回に行きました。使徒の働きでは、パウロの一行が今のトルコを行き巡った記録がありますし、ペテロ第一を見ると、「1:1 ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビティニアに散って寄留している選ばれた人たち」とありますから、ペテロもこれらの地域を訪問していた可能性があります。

さらに、血統としてユダヤ人ではない、改宗者もいることも言及しています。「¹¹ ユダヤ人もいれば改宗者もいる。またクレタ人とアラビア人もいる。」と語っていますね。改宗者とは、異邦人だけれどもモーセの命じる割礼と律法を守ることによって、ユダヤ教徒になった人々のことです。クレタとは、地中海に浮かぶクレタ島で、アラビアは今のヨルダンの南部から南を指していて、ヨルダンのペトラも、かつてはアラビア地方に含まれていたのではないかと語られています。彼らは必ずしも血統的にユダヤ人ではなく、改宗者だったのかもしれませんが。そうすると、さらにペテロの語る福音の対象は広がります。肉によるユダヤ人だけでなく、異邦人も含まれるということです。ルカも、もしかしたら改宗したユダヤ教徒ではなかったとも言われますが、彼らは、福音を異邦人に伝える橋渡し役を担う人々になっていきます。

ところで、彼らは「神の大きなみわざを語る」と語っています。福音を語る時は、ユダヤ人が当時語っていた、ヘブル語、あるいはアラム語とも言われていますが、それを語ったのであり、異言においては神の大きなみわざを語っていました。コリント第一 14 章においても、「14:2 異言で語る人は、人に向かって語るのではなく、神に向かって語ります。だれも理解できませんが、御霊によって奥義を語るのです。」とあります。異言の解き明かしの賜物がまた別にあり、解き明かしがあれば、聞いているが理解することができるので、人の徳を高めることとなります。それでパウロは、解き明かす人がいない時は、公の集まりでは異言で語るのを控えるように、一人で祈り、賛美する時に用いることを勧めています。私たちの教会でも、公の礼拝において異言を語っていないのはそのためです。コリント第一 14 章にある使徒パウロの指針に基づきます。私的な場で、また信者が集まって、互いに信頼している中であれば、異言を語ることは許されます。

¹² 人々はみな驚き当惑して、「いったい、これはどうしたことか」と言い合った。¹³ だが、「彼らは新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言って、嘲る者たちもいた。

人々が驚く時、それは神をほめたたえる、あがめるか、それとも、嘲るかのどちらかになるでしょう。イエス様が奇跡を行われた時、多くが神をあがめましたが、それでも信じないで拒んだ人による、中傷が始まりました。嘲る人は必ずいます。次にペテロは、この嘲りをむしろ利用して、福音を語り始めるのです。

私たちは前回、すべての人に主が聖霊のバプテスマを受けることを意図しておられたことを学びました。始めの弟子たちの場合は、このような形でバプテスマを受けたのですが、これから使徒の働きを見て行けば、いろいろ違った形で受けていく姿を見ていきます。みなさん一人一人、信じる者たちに与えられる、証しのための力です。ぜひ求めてください、そして聖霊に満たされてください。